

■サレジオ会総長による「2017年の年間目標（ストレンナ）」の要約 翻訳改訂版

私たちは家族です！——いのちと愛の学び舎としての、あらゆる家庭

1. 私たちは家族です！ そして私たちは家族として生まれました！

* (1) 「2006年の年間目標（ストレンナ）」は、すでに家族に焦点を当てたものでした。それについては、資料を参照することができます（註1）。それと同時に、二つのシノドス（世界代表司教会議）をとおして経験した出来事と、教皇フランシスコによる使徒的勧告『愛のよろこび（アモーリス・レティティア）』（*Amoris laetitia*; 2016年3月19日）の発布は——サレジオ家族としてもよろこばしく思っていますが——、家族に対する教育的で牧者の愛にもとづく関心の視点からも重要なものです。

* (2) 私たちのすべては、家族のなかで生まれたという強烈な個人的経験を持っています。それぞれの家族は美しくもあり、同時に限界もあります。ともかく、私たちは皆、**家族として生まれます**。最終的に家族のなかで生きるしかないのです。まさに、**いのちと愛の学び舎としての訓練の場**という非常に具体的な人間の現状を反映するものが家族なのです。

* (3) 私たちがよくわきまえているように、家族とは、それぞれの人間性によって創りあげられてゆくものです。家族のそれぞれのメンバーは、誰かを大切にし、語りかけ、分かち合い、身をささげる、という、おたがいに相手をかばって、いかなる代償をもいとわなほの関わり方を実現させます。人間というものは、通常は、家族のなかで生きることによって、かけがえのない人格として両親と一緒に成長し、家庭の暖かさを呼吸します。

* (4) 家族のなかで、つまり家庭において、私たちは名前を授けられ、そうすることで、かけがえのない存在として大切にされます。私たちは愛情を経験し、親密さを実感します。こうして、私たちは存在することを認められ、ゆるし合い、感謝することを学ぶのです。

* (5) 家族はまた——私たちがよくわきまえているように——子どもにとっての初めての学び舎です。そして、若者に帰属意識を芽生えさせるために欠かせない集まりであり、さらには高齢者のための最良の逃げ場でもあります。

* (6) これらのことは、すでに、私たちのみならず、あらゆる人々が共通の

人間性として、人類全体にわたる家族の次元として、生きてきたものです。

* (7) 同時に、私たちは家族の現実が意味している、愛のまじわりとしての三位一体の神の偉大なるしるしとしての秘跡というまじわりの愛を生きる、言わば神の視点を見失ってはならないでしょう。

* (8) 家族はまた、母親のおなかでもあります。ちょうど、神の御独り子が人間としての歩みを始めたときの、あの母胎と同じです。

* (9) さらに、今回の「年間目標（ストレンナ）」をとおしてサレジオ家族全体が、**私たちが家族である**という感覚を強めるとともに、絶えず成長させることが欠かせません。

* (10) 信仰共同体（修道会、専門機関、使徒的な生活の会、信徒の協力体など）として、私たちは団結しており、その絆を強く意識しています。

* (11) ほとんどすべてのサレジオ家族の活動グループは、さまざまな決まり事のなかで、家族的な精神および家族的な雰囲気、私たちの自身の存在の核をなす重要な要素として強調してきました。家族をとおして、家族とともに、家族のための司牧的な活動を展開する際に、それらの要素が重要になります。

* (12) この要約では、サレジオ家族としての私たちの義務を説明することになります。私たちの義務は、普遍的な教会が現在の教皇フランシスコの指導のもとで強力に推進していることを実践するにとどまりません。さらに、私たちには、ひとつのささやかな貢献として、「サレジオ会員ならではの物事の眺め方」——子どもたちや若者たちの教育者としての物事の眺め方——を教会全体の指導方針のなかに浸透させることが課せられています。

2. 準備ができた心で、おだやかに、心を開いて物事を眺める（読み込む）ことへの招き

* (1) 私は、まず何にもまして優先的に、おだやかに、心を開いて使徒的勧告『愛のよろこび』を読み込むことをお勧めします。教皇が述べていることに対して注意深く心を寄せて、対話し、出合うことができるように。そうしてこそ、私たち自身がサレジオ家族として、教皇の文書が何をもたらすのかを理解することができます。そのような読書は、家族の現状を乗り越えつつ、あらゆる

る人のための神の偉大なる贈りものとして認められるとともに賞讃されるようなサレジオ家族らしい愛情に満ちたふるまいをもたらします。そして、神の計画の充満のなかで納得して憩うことができるような愛のふるまいをももたらすのです。私たちの助けを必要とする、つまり私たちの寄り添いを待ち望んでいる、時として壊れている、あるいは大きな困難をかかえこんで苦しんでいる夫婦や家族が愛の生活を取り戻すための計画を立てるために。

* (2) この使徒的勧告『愛のよろこび』は、カトリック信仰の視点にもとづく人類への奉仕であるとともに、まことの霊的かつ司牧的な宝です。そして、この文書を読み込むことによって、「私たちがサレジオ家族である」ということに気づかされます。

* (3) 教皇の使徒的勧告『愛のよろこび』は、前任の教皇たち、つまり聖ヨハネ・パウロ 2 世およびベネディクト 16 世の教えにもとづいています。そして、頻繁に引用される 2014 年と 2015 年のシノドスの報告書にもとづいています。ここで前もって強調しておきますが、それは長年にわたる教会の内省を要約しています。それと同時に、法的なレベルから司牧的なレベルへの変化を反映しています。文書の書き方や語り口調や視点が洗練されてきているのです。教皇自身が次のように述べています。「私たちは謙虚で現実的にならなければなりません。いつでも気づいていないと……つねづね、結婚の神学的な観念をあまりにも形式的に思い描きすぎることに。あまりにもしゃちほこばった状況設定にこだわり過ぎており、それぞれの生身の家族の現実的な可能性を見落としているということに。このような行き過ぎた理想化は、とくに神の恵みへの信頼によって鼓舞されなかった場合に、結婚を成就させる助けにはならないのです。つまり、結婚を、より情熱的で魅力的なものとするのに、いささかも役立ちはしないのです」(『愛のよろこび』第 36 項)。

2.1. 教皇の使徒的勧告『愛のよろこび』の内容の統合的な理解——それぞれの家族といっしょにサレジオ家族としての私たちの義務を発見すること

* (1) この使徒的勧告『愛のよろこび』のテキストには、周知のように、教皇フランシスによる導き方の独特な諸特徴が含まれています。つまり、現実的で、親密で、直接的で、示唆に富むテキストになっています。単にテキストの理念を何らかの主題として受け身の立場で理解させるにとどまらず、むしろ私たちを、すぐにでも行動するように駆り立てるような開かれたテキストになっているわけです。私たち自身の人生と個人的な召し出しにおいて、いのちと愛

の秘義を生き抜くべく努めるように。教皇の勧告は、抽象的な方法で家族について語る文書などではなく、それを必要とする多くの人々に励ましの言葉を伝えるために、彼らの人生に触れるものになっています。

* (2) 使徒的勧告『愛のよろこび』をとおして、教皇は、家族に関して、聖書的で神学的な視点で眺め直すとともに、婚姻にもとづいた家族の重要性と美しさを強調し、夫婦間の愛の諸価値を深めることに私たちを招き、人類のいのちを充実させる神のまことの賜物を自覚するための道徳的で司牧的な「集約」(summa)を試みています。そのような集約は、人間的な愛の肯定的で人間らしい味わいのある局面を引き出すことを私たちに促してくれます。つまり、人間による計画の挫折よりも、はるかに強い神の愛を常に私たちに思い起させてくれるのです。

* (3) この教皇文書は、婚姻の現状を照らし出す **9 つの章で構成**されています。そして、家族の様々な視点からの眺めを伝え、数多くの不足や痛ましい状況と神の計画の美しい現実とが、具体的なかたちで慈悲深いまなざしと調和するように努める生き方の意義が浮き彫りになります。各章は、あわれみと慈悲によって、まことに忠実に関連づけられています。この文書は、現状を決して無視することなく、常にイエス・キリストへの信仰の視点から描いています。つまり神のことばによって照らされています。実り豊かな子どもたちの教育を目指し、脆弱で不完全な状況のまっただなかで歩みつづける際の支えとなるような司牧的な提案をもたらす家族の愛が常に中心的なテーマとなっています。

■使徒的勧告『愛のよろこび』の第 1 章は「神のことばの光において」と題されています。教会で必要不可欠とされている教義と実践の結束を思い起こさせると同時に、さまざまな国の文化や伝統や挑戦の重要性をも強調しています。つまり、結婚についての教えのいくつかの側面は「さまざまな異なる方法によって」解釈されるかもしれないのです。男女によって形成される婚姻の美しさを確認するとともに、対話や配偶者の一致や家族の優しさの重要性を述べています。言わば、抽象的な理想としてではなく、むしろ「職人わざ」を洗練させる場として家族を定義づけます。

■『愛のよろこび』の第 2 章は「それぞれの家族の経験と現状」と題されています。この章は、「現実にしつかりと根差そうとする」(『愛のよろこび』第 6 項) 欲求に突き動かされつつ、家族の現状や課題を調査し尽くしているのです。その際に、社会学的で文化的な視点にもとづくニュアンスでの調査がなされて

おり、現実的であるとともに希望に満ちたビジョンを探究しようと志しています。それは諸テーマのふり幅が大きく、それゆえにそれぞれの文脈が微妙な見立てを必要としているため、極度な単純化を避けるためです。使徒的勧告は、次のように述べています。「理想的な家族というステレオタイプではなく、むしろ、よろこびや希望や数多くの問題のある、多様な現状から成り立つ挑発的なモザイクとして家族を眺めましょう。私たちに関わってくる状況が挑戦をもたらすのです。私たちは、哀れな嘆きを繰り返すことでエネルギーを無駄にするのではなく、創造的な使命の新たな表現形式を模索すべきです」(『愛のよろこび』第 57 項)。

■『愛のよろこび』の第 3 章は「イエスを眺める——家族の召命をとおして」と題されています。福音のあかしへと門戸を開き、教会の教えや秘跡的な現実を踏まえつつも、例外的で複雑な状況のなかで子どものいのちや信仰の伝達を成し遂げることに焦点が当てられています。「それぞれの家族における愛の経験は、教会の生活を強めるための永続的な源なのです」(『愛のよろこび』第 88 項)。

■『愛のよろこび』の第 4 章は「結婚における愛」と題されています。いわゆる「愛の讃歌」として、よく知られている第一コリント書 13 章の内容を美しく解説しています。つまり、この章は、繊細な美しさを伴って、決して理想化することなく、ありのままの現実のさまざまな側面を示そうとしています(「牧歌的な愛や完璧な愛を夢見ることを、いたずらに助長するようなことではないわけです」『愛のよろこび』第 135 項)。しかしながら、親密さや生活の分かち合いや友情に裏打ちされた愛情や対話や変容をもたらす成長のダイナミズムにおいて常に導かれるような夫婦愛という理想を目指しています。教皇フランシスコが若者に向かって直接的に語っている言葉の数々は推奨できるものです(『愛のよろこび』第 131-132 項)。

■『愛のよろこび』の第 5 章は「実りをもたらす愛」と題されています。広大で、実り豊かで、ダイナミックで情熱的な愛が語られています。実り豊かさ、世代、成熟プロセスにおける父と母の理解などがキーワードになっています。豊かさとは、「身体のスこやかさ」(『愛のよろこび』第 185-186 項)と言えるでしょう。そして、「関わりの広がりゆくような家族」をも示唆しているでしょう。「大らかな心」(『愛のよろこび』第 196 項)を備えることで、子どもたちや祖父母や兄弟姉妹もまた、家族が公的な場と私的な場とを結びつけて統合する一致点となるように、この章の内容が読者を招いています。

■具体的な生活のなかで信仰者としての生き方を深めるには、司牧的な章が不可欠となります。それで、『愛のよろこび』の第6章は「いくつかの司牧的な視点」と題されています。司牧の仕事にたずさわる人々は、対象者たちの結婚生活の最初の年に婚姻の準備を手助けしつつ伴走する（同伴する）のですが、その際に、かなり踏み込んだかたちで具体的に支えます。相手の状況をつかむために質問を投げかけることで焦点をしぼるための間合いのとりかたがあり、ダイナミックでこまやかな接触のしかたを試みるために「危機に向き合い、配慮しつつ、困難さに光を当てます」（『愛のよろこび』第231項以下）。

■『愛のよろこび』の第7章は「子どものよりよい教育に向けて」（『愛のよろこび』第259–290項）と題されています。子どもたちは未来を拓くための希望です。第7章の各頁をとおして、子どもたちとの関わりの際に必要な親密さや共存、倫理的な養成、権威の確立、生活の文脈、性教育（具体的で役立つものとしての性教育がなされるべきです。そして、子どもたちに恐れをいだかせたりせず、あるいは興味本位な取り扱いかたをしないことも重要です）を心がけることで、信仰の伝達が実現することが説かれています。

■こうして、教皇フランシスコは、「あらゆる人が第8章そのものから挑戦を突き付けられることになるだろう」と述べています。『愛のよろこび』の第8章は、「弱さをかかえる者に対する同伴、識別、統合」（『愛のよろこび』第291–312項）と題されています。正確で厳しい基準を求めている人は、失望するかもしれません。教皇は司牧的な意味での漸進主義を提案し、識別の仕方を奨励し、「内的な法廷」（『愛のよろこび』第300項）の道行きに則り、司牧的な識別（『愛のよろこび』第301項）の要因を強調し、慈悲の論理を中心に据えます（『愛のよろこび』第307項）。教皇は「デリケートな問題に取り組む際には、冷たい官僚的な道徳を避けるための枠組みを設定するように、私たちに勧めているのです」（『愛のよろこび』第312項）。

■『愛のよろこび』の第9章と最後の祈りの部分は、「結婚および家族の精神性」（『愛のよろこび』第313–325項）と題されています。刺激的でありつつも単純なやりかたで、教皇は、私たちだけにひそかに語りかけるようにして親密に関わりつつも自在に開放された精神性へと招きます。つまり、ケア（配慮）の精神性、慰め、気力を取り戻させる、という方向性に向かわせるのです。いくぶんかの苦みを伴う日々において、キリストは信仰にもとづいて家族の生活を統合しつつ照らしています。このため、「歩きつづけましょう、それぞれの家族の皆さん、どうか歩きつづけてまいりましょう、決して希望を失わないよう

に」。

* 私たちは、家族こそが世界にとっての善き知らせ（家族の福音）であると確信しています。つまり、社会や教会が協調してゆけると、さらによりいっそう協調してゆけるのだと私たちは切に望んでいるのであり、サレジオの信仰共同体には家族の福音が現存しているのだと私たちは確信しているのです。

3. いのちと愛の学び舎としてのあらゆる家庭——私たちの教育司牧的な貢献

3.1. 親身になって形成や修復の手助けをしてくれること

私たちは、複雑で困難な状況で生きざるを得ない家族の現実に、しばしば直面しています。以下のとおりです。

* (1) バラバラになってしまった、それぞれの家族（「パッチワーク」のような、それぞれの家族）。

* (2) おたがいを信じながらも、あらゆる意味で通常のあるべき姿を逸脱してゆくような、うやむやな状態に陥っている、それぞれの家族。

* (3) 数知れない傷に打ちのめされている、それぞれの家族。

* (4) 分裂を生み出すような利己主義を秘めている、それぞれの家族。

* (5) とくに子どもたちの心を傷つけ、あるいは、しばしば子どもたちが「不和の犠牲者」（教皇フランシスコがよく用いる表現）となってしまうような状況に陥っている、それぞれの家族。

教育者や牧者としての現実から出発して、私たちはすでにこれらの家族に益をもたらせるような何かをすることができるかどうかを自問してきています。以下に述べておきます。

* (1) こうした状況に起因する苦しみに直面して、**親身になって相手と一体化するほどの共感 (empathy)** をいただくように私たちは求められています。

* (2) 私たちが相手といっしょに人間関係を築きあげ、数々の傷をいやし、のしかかる恐怖を取り除く手助けをしてゆかなければならないという実存的な状況があります。聖書の文脈にもとづいて言えば、「彼は傷ついた葦を折らず」（マタイ 12・20、他に「折れた葦を彼は断ち切らず」【イザヤ 42・3】も参照の

こと) という箇所が参考になるでしょう。

* (3) これらの人々のそれぞれの人生にも数多くの恵みと寛大さがおよぼされることが実感できるように支えることができる状況をもたらすことが急務です。

* (4) まず、道義的な要素について述べましょう。家族となることを学ぶには、常に謙遜と理解を深め、ゆるしと慈悲を生きることが、間違いなく重要となります。あらゆる人は、生きることをゆるされており、家族を育み、自分自身の人生をやり直すための資格があります。

* (5) 次に、感情的な要素について述べましょう。自分の限界ある現状を受け容れることで、家族のそれぞれのメンバーは、自分自身を愛情豊かに満たす機会を得ることができ、さらに自分自身のはたらきをとおして他者を豊かに満たす機会も得ることができます。無償の愛を生きることが、家族を育むための出発点となります。

* (6) さらに、精神的な要素について述べましょう。統合的なコミュニケーションを妨げる人間の状態としては、独りきりになろうとしてしまう根強い傾向が挙げられます。逆に言えば、根本的な飛躍をもたらすほどに、この欲求をじゅうぶんに満たしてくれるのは、誰か他の「相手」だけであるのです。

* (7) 何にもまして、私たちは相手を育み、修復することに全力を尽くすように出動すべく望まれているのです。

3.2. 家族としてのいのちの学び舎で

サレジオ会員としての立場からは、家族の重要な教育的な価値について、上から目線で教え込むことはできません。まず、第一に、私たち一人ひとりが自分たちの個人的な経験を参照すると同時に、サレジオ家族の創設者であるドン・ボスコにとっての家族の経験をも眺めなければなりません。彼は幼い頃に父親を亡くしました。ドン・ボスコの母親であるマルガリータは、彼にとっては初めて、信仰の次元(超越的なことから)を考えさせてくれる決定的な教育者でした。あの母親がいたからこそ、ドン・ボスコが存在し得たということを、私たちはよくわきまえています。

私は、ひとつの鍵を皆さんに授けたいのです。まず、何よりも家族がいのちの学び舎であることを肝に銘じてください。この学び舎で見つける使命のなか

で、ある人や、ある団体や、ある機関がそれぞれのよりどころとする暖かいふるさととしての家庭を実感するようになります。ほんとうの学び舎のなかでこそ、私たちはそれぞれの人生を準備し、愛情に満たされて他者への愛を生きるように導かれるのです。次のとおりです。

* (1) 家族が「収入や消費の中心」あるいは「感情的なぶつかり合いの場」以上の意味をもつものとして理解されるように、大人とくに両親がその責任を果たすように努めることが必要になります。

* (2) 家族同士のコミュニケーションが活発で、役立つか役立たないかという経済効果の話題に偏らないことが必要になります。

* (3) 子どもたちが成長するのに必要な訓練を受けることができ、倫理的な責任が具体的に期待され、深い確信が表明され、絶えざる話し合いがなされ、厳しい監視下のもとで誰かを悩ませるのではないかという恐れにおびえて生きることがない状況づくりが欠かせません。

* (4) 子どもたちが毎日の家庭生活を安心して過ごせるような教育が施され、各人の必要性や権利や義務や相互尊重に関して、それぞれの平等性を経験することができるような発展的な状況を目指すことが欠かせません。

* (5) 相手を認め、その活動を尊重するなかで、対話に支えられたほんとうの関係性を目指す能力が磨かれ、他者の利益を真摯に求めてゆけるような完全な相互主義を活かすための余地が残されていることが欠かせません。

* (6) 家族が愛の経験の場となり、法的な制約による重荷を感じる場所としてではなく、自発的に愛することを学ぶ場所となることが欠かせません。これを、信仰の視点で言えば、それぞれの結婚やそれぞれの家族の生活こそが「救いの歴史」を反映しているのです。

* (7) いのちの学び舎である家族は、一見すると矛盾するかのような要素を含みながらも調和のとれた性質を帯びています。以下のとおりです。

- ・「自発性」と「責任感」
- ・「自律」と「団結」
- ・「自分を気遣うこと」と同時に「あらゆる人の利益を追求すること」
- ・「健全な競争力」と「相手を受け容れる能力」
- ・「コミュニケーションを推進する能力」と同時に「傾聴および相手に対する

尊敬に満ちた静寂」

* (8) こうして、家族は生きるうえでの価値観や希望を授けてくれる場なので、まさに、いのちの学び舎なのです。たしかに、家族は親密さと愛のうちに、導きや修正や予防や助けやいやしによって最終的には安心感をもたらすものになります。

3.3. サレジオ会員による牧者としての使命——「ともにいること」(同伴 ACCOMPANIMENT)

サレジオ家族として、私たちは今まで以上に現代的なこの美しいチャレンジを提案してみたいのです。

* (1) 親、配偶者、およびその親族に対して、どのように「ともにいること」ができるかを問いかけたいのです。

* (2) 子どもたち、とくに世界中のサレジオ家族のいる場所に存在するすべての住居や活動や奉仕の仕方が住む人々に寄り添って歩むうえでふさわしい仕上がりとなっているのかどうかを見きわめる方法はどのように見出せばよいのかを問いかけたいのです。

* (3) 仲間や家族を育むための人生設計を準備している青少年たちが、他の青少年や家族や小教区司牧の場のなかで、多様な人々とどのようにしていっしょに歩んでゆけるのかを問いたいのです。

奉仕を行うに際して、いくつかの決意が必要になってきます。以下に述べてゆきましょう。

3.3.1. それぞれの家族に対して優先的に**教育司牧的な注意を払うこと**を確実に推進しましょう。

3.3.2. 「ともにいること」(同伴) を優先的なかたちで奉仕するための決定的で堅固な一歩を踏み出しましょう。それは以下のようなになります。

* (1) 両親、あるいは子どもたちを受け容れる配偶者に対して、サレジオ会員が「ともにいること」(同伴) を実践しましょう。

* (2) 世界中に広がるサレジオ会の関連施設の子どもたちや若者たちと「ともにいること」(同伴) を実践しましょう。とくに、彼らが家族との関わりのなかの問題や個人的な困難に取り組んでいるときに、サレジオ会員が「ともにい

ること」(同伴)が重要となるからです。

* (3) 婚姻を含む生活の計画を具体的に立てている青少年たちに対して、召命を見きわめるうえで、サレジオ会員が「ともにいること」(同伴)を実践しましょう。

* (4) 最も多様な家族の現状のなかで、霊性と信仰を人生の意味として提供するうえで、サレジオ会員が「ともにいること」(同伴)を実現させましょう。

3.3.3.サレジオ家族としての緊急課題を探してみると、それぞれの家族の現状にもっと注意を払い、福音の本質的な価値としての慈悲の実施に対して優先的な位置づけで物事を理解すべきことが見えてきます。その際に、私たちの教育司牧的な活動においては、**教会の方針を反映させて進むとともに、識別を施す**うえでの**長期的な歩みをたどっている**ことが明らかになります。

3.3.4.それゆえ、私たちは、キリスト者の理想とはまったく異なる多様な生活状況に直面しているときに一本化された答えを期待することなく、むしろ結婚や家族の歴史に影響をおよぼすような、相手を具体的に活気づかせる奉仕を提供します。こうして、**個人的にも、司牧的にも、もののみかたを深めてゆく**ことができるようになるのです。

3.3.5.これまでの考察によって、家族が支援や「ともにいること」(同伴)を決して拒めないような教育方法を示すような場所(『愛のよろこび』第260項)が必要となります。その際、私たちは自分たちが非常に多くのものを提供できると確信しているのですが、それこそが「サレジオらしいこと」なのです。それゆえに、**それぞれの家族を支えつづけ、愛情とまごころによって教育し、成長をもたらしてください**。それこそが、私たちの教育的な(「予防的」な)システムのすべてなのです。

3.3.6.子どもたちの性教育に携わる両親を支えるためにも、愛へと向かう権威ある教育の仕方の発展に真剣に取り組まなければなりません。

3.3.7.私たちは、「召命」としての**秘跡的な結婚の価値**や**識別の実り**(すべての召命にも当てはまることなのですが)を相手に実感させるとともに、聖なる歩みへと導く方向性をも見出せるように手助けをします。

3.3.8.私たちは、愛するよろこびの感覚をそれぞれの家族が育ててゆけるように世話することで、彼らの生活の深まりに貢献します。

3.3.9.親が子どもを育て、自由な雰囲気の中で神を理解しつつ愛することができるような「生活空間」が実現するように、それぞれの家族を助けましょう。

3.3.10.家族のさまざまな現状には限界がありますが、それぞれの家族、教育者、若者を教育する機会を得ることは、創造の価値へと向かって自分自身（サレジオ会員自身）が教育される機会にもなります。私たちが創造の豊かさに想いを馳せながらも、貧しさに対する対応の仕方を工夫すべく努めてゆく責任を果たさないかぎり、創造のときの万物の調和のよろこびは生じてはこないのです。

3.3.11.それぞれの家族をとおしてサレジオ家族の基本的な方向性への協力姿勢を実現させることが必要です。たとえば、ドン・ボスコの予防教育システムに照らされたサレジオ家族の使命を見直すことが重要となります。つまり、この世界を、友人となり、生計をたてる訓練を重ね、神と出会うための、巨大な家族の遊び場としての家庭のようにすることが重要です。

再び活気づきつつある最近の教会の動向のなかで、サレジオ家族としての協力姿勢を充実させるために、この巡礼の旅路を進むに際して、聖母の御保護を常に願い求めてまいりましょう。

ローマにて 2016年6月19日

(註1) パスクアル・チャーベス総長書簡「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された(ルカ 2・52)」(『ACG』 第392巻、サレジオ会、ローマ、2006年、3-46頁、所載)。

2017年1月3日(火) 試訳; 阿部仲麻呂
2017年1月4日(水) 改訂